遊戯王５Ｄ’ｓ　－Healing Each Raging Odium－

みーさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王５Ｄ’ｓ －Ｈｅａｌｉｎｇ Ｅａｃｈ Ｒａｇｉｎｇ Ｏｄｉｕｍ－

【Ｎコード】
Ｎ３９７９Ｐ

【作者名】
みーさん

【あらすじ】
デュエルアカデミア・ネオドミノ校に治安維持局から一本の電話が入った。「フォーチュンカップの出場者が一人辞退しましたので、そちらから一人、将来有望なデュエリストを出していただきたい」そしてデュエルアカデミアは出場者を募って選考デュエルを開く。

高等部に通い、日々「ＨＥＲＯ」の可能性を考える少年、水無月ヒカル。彼もまた選考デュエルに参加した。ある一つの想いを抱え

ながら。

当小説ではオリカ（チート分は基本なし）が乱舞します。苦手な人はバックしてください。

題名は「ＨＥＲＯ」に強引に英単語を当てただけで、用法用量を激しく間違っております。強引に訳すと「苛烈な憎悪を癒すこと」となります。そう読んでください。

プロローグ　選考デュエル決勝戦（前書き）

「破滅の剣がリリカルに・・・・」の方の特別編の後書きに書いていた遊戯王５Ｄ，ｓの再編小説、細々と書いていました。

プロローグ　選考デュエル決勝戦

――――カーン、カーン、カーン！

授業終了の鐘の音が校舎に響き渡る。教師が軽く挨拶をして退出すると、学生はいそいそと荷物をたたんで帰る準備を始めるが、校舎から出ようとする生徒はひとりもいない。その時、ブツ・・という音が教室の前のスピーカーから聞こえた。

「あー、あー、三年生のアオノス・メディチ君と一年生の水無月ヒカル君。選考デュエル決勝戦を開始しますので、準備をして四時二十分までに体育館まで来てください」

そう言うと、放送は切れた。

ここはデュエルモンスターズを専門に学ぶ学校、デュエルアカデミア。そしてこの校舎は新設されたネオドミノ校。広い敷地、美しい自然に囲まれた海馬コーポレーション及びＩ２社が運営する教育機関である。

そして一年Ｄ組の教室、周りの生徒とは違い、一人だけ腕にデュエルディスクを付けている男子がいる。暗いエメラルドブルーの髪に、同じ色だが薄く、南国の海のような色の瞳をした少年だ。だが、その態度は瞳のイメージとは違い、他人を寄せ付けない。制服をキッチリと着こなし、タイを緩めることなく立ち上がった。

彼は先ほど放送で呼ばれた水無月ヒカルだ。ヒカルは放送を聞くと、カバンを手に持ち、教室を出ていく。彼の歩く先の生徒は道をあける。

その中で、数人の生徒はヒカルに声をかけた。

「ヒカル、頑張れよ！」

「ヒカル君・・頑張って」

「水無月、しっかりな！」

ヒカルはその激励の声に「あぁ」とだけ答え、教室を出た。そっけない態度だが、彼に声をかけた生徒には特に気を害した様子はな

い。そういう性格なのだということを知っているのだ。ヒカルはその一匹狼的な態度で距離を取られてはいるが、避けられているわけではない。

ヒカルは廊下を歩きながら鞄を開き、その中から不可思議なデュエルディスクを取り出した。９０度の扇形のようなカードを読み込む部分が5方向に、ヒトデのように配置された漆黒に近いエメラルドブルーに白いラインの入ったディスクだ。怜悧な印象を相手に与える。

ヒカルはデュエルアカデミア支給のディスクからデッキを外すと、ヒトデのようなデュエルディスクのデッキホルダーにデッキをセットする。するとデッキはディスクの内部に引っ込み、見えなくなった。

ヒカルがこのディスクを使うのは本気の印だ。もちろん、何か特殊な細工がしてあるわけではない。しいて言うのなら、このデュエルディスクはヒカルの手作りであり、市販のものとは比べ物にならないほどに頑丈で、録画録音機能やタイムウォッチなど、デュエルとは直接関係ない機能まで充実している。

ただ、今回このディスク、デッキを使うことはない。ヒカルは腰のカードホルダーから新たなデッキを取り出し、デュエルアカデミア指定の腕にはめているディスクにセットする。正直、あのデッキはフォーチュンカップまで温存しておきたい。

ヒカルは校舎を出て、渡り廊下から体育館に向かう。周囲には同じ方向に向かう生徒が多く見受けられる。誰もがこの決勝戦を楽しみにしているようだ。

ヒカルが体育館に入ると、既に中にはかなりの数の生徒がいて、二階の観客席も全席が埋まっている。
その体育館の中心、楕円形の線の書かれたデュエルスペースには審判であるアカデミア教師と、デュエルの相手である先輩、アオノスが立っている。アオノスは既に腕にデュエルディスクを付けており、準備万端といった様子だ。そして、少し離れたところに校長と教頭をはじめとするアカデミアでもそれなりの地位を持つ教師たちが観戦、及びデュエルの評価をしようとパイプ椅子に座ってペンを持っている。
このデュエルは一週間後に行われるデュエル・オブ・フォーチュンカップの出場者を選ぶものだ。大会の主催者側から選手が一人出場を拒否したということで、将来有望なアカデミア生を一人出してくださという催促が来た。そして校長は希望者を募り、こうして授業後にデュエルで出場者を決めているわけである。
希望者はもちろんだが多く、何日もかかったが、今日こうしてトーナメント形式の選考デュエルの決勝戦が行われるわけである。
実のところヒカルはそれほどフォーチュンカップに興味があるわけでもない。デュエリストである以上、キングと戦え、そして自分がデュエルキングとなれる機会があるのは無論歓迎することだが、ヒカルには今それ以上に使命ともいえるモノを抱えている。だが、それが行き詰っているのも事実だった。だが万に一つ、フォーチュンカップで探し物が見つかることがあるかもしれない。何せあそこは・・・・。
そこまで考えて、ヒカルはそのことについて考えるのをやめた。今考えても意味はない。とにかくフォーチュンカップには出てみようと思っている。本来のデッキを仕舞った俺がいうのもなんだが、全力でやるのみ、そう思った。
ヒカルは対戦者のいる方とは反対側まで歩いて行き、足を止めた。
教師はそれを確認すると腕時計に目を落とし、ヒカルとアオノスを交互に見た。

「時間は四時十五分。少し早いですが二人とも位置についたので、今から選考デュエル決勝戦を始めようと思います。二人とも、準備はいいですか？」
「私は準備万端なノーネ！」
何だか変な話し方をする先輩だなとヒカルは思う。
「オレも準備はできています」
その声を聞いた教師は一度頷き、宣言した。
「デュエル開始！」
その声とともにヒカルはディスクを起動する。たたまれているカード読み込み部分がスライドし、軽く発光する。カードがシャッフルされ、最後にカウンターにライフが表示された。

「「デュエル！」」

「オレのターン、ドロー」
ヒカルはそこで一息入れ、周囲を確認した。相手の背後には赤いタイの学生、つまり三年生が多い。当然、相手側の応援である。「一年に負けんなよ～、アオノス！」という声がヒカルの耳に届く。そしてヒカルの後ろには一年が多いようだった。二年生は主に二階に多い。どちらが勝ってもいいが後学のために見ておこう、とにかく優勝した相手を見ておきたい――という考えのものが多いだろう。
「オレは手札から魔法カードデステニー・ドローを発動。Ｄ－ＨＥＲＯ　ダッシュ・ガイを墓地に捨て、カードを二枚ドロー。ディープ・ダイバーを守備表示で召喚。カードを一枚伏せ、ターンエンド」
「ワタシのターン！ドロー！ワタシはトロイホースを召喚！さらに、魔法カード二重召喚を手札から発動！トロイホースを生け贄に、アンティーク・ギア・ゴーレムを特殊召喚するノーネ！」
貫通効果を持った上級モンスター、宙に浮かぶカウンターにはＡＴＫ３０００の文字。ヒカルは少しマズイ・・と思った。

「アンティーク・ギア・ゴーレムの攻撃！アルティメット・パウーンド！」
ディープ・ダイバーが破壊され、貫通ダメージでヒカルのライフは１９００ポイント削られる。

ヒカルＬＰ４０００→２１００

「ディープ・ダイバーが戦闘で破壊されたバトルステップ終了時、デッキからモンスターカードを一枚選択し、デッキの一番上に置く。オレはＤ－ＨＥＲＯ　ディアボリック・ガイを選択する」
「どんなことをしようと無駄なノーネ！ワタシはカードを二枚伏せ、ターンエンド！ニュフフ、もう私の価値は決まったようなものなノーネ」
アオノスはいやらしい笑みをヒカルに向けた。その後ろの三年生もニヤニヤと見下した笑みをヒカルやその後ろの一年生に向けた。
その笑みを向けられた一年生は「またあの先輩あのデッキ使ってやがる！」と憤っている。アンティーク関連カードはアカデミア教頭以上に配布されるカードだったか。生徒では絶対に手に入れられないものだからこそ、それを使っているアオノスに憤っているのだろうと、ヒカルはアタリをつけた。そして何故アオノスがそんなカードを持っているのか、おそらくそれはアオノスの先祖が教頭以上の地位にあったからだろう。まぁ、今はそんなことは関係ない。
「オレのターン、カードドロー」
今の手札ならこの状況を打破することなど雑作もない。あの伏せカードは気になるが、除去トラップだったとしても伏せカードは王宮のお触れ。除去魔法・トラップだったとしても何とかなる。速攻魔法は防ぎきれないが、多くの速攻魔法はオレの手札を止めきれないだろう、とヒカルは思う。
余談だが、除去魔法・トラップ、そして帝モンスターはその多くが禁止もしくは制限カードとなっており、それらを満載したデッキ

は組めないようになってしまった。もう何十年も前の話だ。自然と禁止カードのたぐいは見なくなり、手に入れることすら今は困難だ。
大体の内訳としては、召喚・特殊召喚反応型のトラップカード、除外する効果を持つ除去カードが禁止か制限。対象を取らないカード、モンスター、魔法・トラップを選ばないがもの制限。対象を取る除去カードや種族に縛りのあるが準制限となっている。複数除去カードはライトニング・ボルテックス以外は全て禁止だ。
「この瞬間、墓地のダッシュ・ガイの効果発動。ドローしたディアボリック・ガイをその場で特殊召喚する。さらにジェネクス・コントローラーを召喚。レベル６のディアボリック・ガイにレベル３のジェネクス・コントローラーをチューニング、来い！レアル・ジェネクス・クロキシアン！」
機関車に手足の生えたような黒いモンスターがヒカルの場に現れる。
「レアル・ジェネクス・クロキシアンの効果このモンスターのシンクロ召喚に成功したとき、相手フィールドの攻撃力の一番高いモンスターのコントロールを得る。お前の場にモンスターは一体のみ。アンティーク・ギア・ゴーレムのコントロールを得る」
アンティーク・ギア・ゴーレムがヒカルに奪われ、アオノスの顔は真っ青になった。手札を三枚消費して召喚したモンスターだ。そのディスアドバンテージは計り知れない。
「アンティーク・ギア・ゴーレムでダイレクトアタック」
「ちょ、ちょっと待つノーネ！卑怯なノーネ！」
もちろんそんな訴えが通るわけもなく、アンティーク・ギア・ゴーレムの拳がアオノスに直撃する。
アオノスＬＰ４０００→１０００
「続いてレアル・ジェネクス・クロキシアンでダイレクトアタック」

「トラップカード、炸裂装甲を発動！そのモンスターだけでも破壊するノーネ！」
「オレも永続魔法、王宮のお触れを発動。このカードがフィールドで表側表示で存在している限り、トラップカードの効果は無効になる」
「な、なんでスート！！？」
そしてレアル・ジェネクス・クロキシアンの攻撃が決まり、アオノスのライフは０になった。

――――パン！パン！パン！
沈黙の支配した体育館に校長の拍手が響いた。
「すばらしいデュエルでしたよ水無月君。そのタクティクスがあれば、フォーチュンカップでも必ずやいい結果を残してくれるでしょう」
校長はヒカルに白い封筒を渡した。デュエル・オブ・フォーチュンカップ招待状と書かれている。
「皆さんも、依存はありませんね？」
校長は試験管である教師たちに目を向けた。皆一同に頷いているが、ハイトマン教頭は同じアンティーク使いが負けたからか物凄く悔しそうだ。かなり距離のあるヒカルから見ても鼻息が荒いことが分かる。
「では、これにて選考デュエルを終了します」
校長のその言葉に、することのなくなった生徒はわらわらと出口に向かう。
ヒカルは足元に置いていたバッグを掴み、持ち上げる。出入り口は混雑しているので、しばらくその場に止まっていると横を通っていく同学年の生徒から「頑張れよ」と声をかけられた。
しばらくすると人の数も減ってきたので、ヒカルは体育館の外に

出た。渡り廊下を歩いて校舎に戻り、下駄箱で靴に履き替える。そして校舎を出て、ヒカルは溜め息をついた。
いかにも剣呑ですといった感じの生徒が三人、徒党を組んでこちらを睨みつけている。タイの色からして三年。周りにもまだ他の生徒はいるが、知らぬぞんぜぬを貫いている。ヒカルも知らぬぞんぜぬを貫いてその三人の生徒の横を通り過ぎようとした。
「おい、ちょっと待てや」
呼び止められ、肩をつかまれる。とてつもなく不快だった。ヒカルは肩に乗せられた手を払いのけ、そのまま去っていこうとする。
「待てっつってんだろ！」
しかしヒカルは待たない。待つはずもない。
その態度に腹を立てたその生徒は拳を握り締めてヒカルに殴りかかった。周囲の生徒から悲鳴が上がる。
だが、ヒカルはその拳を状態を逸らしてかわし、拳をかわされた生徒は無様にこけた。その生徒を見下ろし、ヒカルは言う。
「オレはお前に話しかけられる筋合いはないんだが」
「テメェになくても俺様にはあるんだよ！！！」
地面に転がっている上級生はヒカルを睨みつけて言う。
「まぁ、話しだけなら聞いてやる」
ただ、流石に鬱陶しいので語気が強くなってしまっている。
「招待状を俺様によこせ！！！」
その予想通りの言葉にヒカルは溜め息をついた。馬鹿らしい、付き合っていられない、心の底からそう思った。
「何故だ？」
「テメェみてぇな一年にはそれはもったいねぇぜ！キングに挑戦するのは俺様が相応しい！」
「選考デュエルで負けたんだろう？それがすべてだ」
「ぐ・・あのときは手札が悪かったんだよ！！！」
それをカバーするのもデュエリストの腕だ。都合のいいことをほざくな。と言いたいのをこらえつつ、ヒカルは話を続ける。

「なにを言おうが、オレにこれを渡す気はない」
ヒカルは踵を返し、去ろうとした。
「後悔してもしらねぇぜ！？テメェら！やっちまえ！！！」
その言葉と共に後ろにいた取り巻きの二人がヒカルに殴りかかる。だがヒカルとしては大振りの、しかも腰の乗っていないパンチなど受けてやることもない。簡単な移動だけでかわせる。
だが、かわされても何度も取り巻きはむかってくる。これで実力の差が分からないのか、とヒカルは呆れつつ、拳を一発前腕で受け止めた。拳が当たったことに取り巻きの一人の顔がほころぶが、ヒカルからしてみれば馬鹿としか言いようがない。
「これで正当防衛だ」
その言葉と共にヒカルは腰を回転させ、右ストレートを取り巻きの顔面に放つ。最短距離で顔面に迫ってくるものというのはかわしにくい。大振りのテレフォンパンチを振り回すチンピラに避けられるはずもなく、いっそ気持ちいいほどにヒカルの拳は取り巻きの鼻に吸い込まれた。折れたかもな・・とヒカルは思う。
横でのびている仲間を唖然と見ているもう一人の取り巻きには前蹴りを入れ、さっさと退場させる。これで一対一になったわけだ。
「チッ！使えねぇ連中だぜ！」
いや、お前もそうだけどな、とヒカルは心の中で呟いた。
「貴様、ヒカルといったな！俺様と勝負しろ！勝ったらその招待状を渡してもらうぜ！」
「お前は馬鹿か・・・・そんなことをしてもオレにはなんの徳もない・・・・とはいえ、ここで引くようなデュエリストはフォーチュンカップには不要か・・・・やるか」
ヒカルは再びデュエルディスクを腕にはめた。俺様な先輩もデュエルディスクを起動する。
「「デュエル！！」」

「俺様の先攻！ドロー！」
カードを引いた先輩はニヤッと笑った。
「ヒャハハハハハハ！この手札なら俺様の勝利は決まったも同然だぜ！！！俺様は魔轟神レイヴンを召喚！さらに効果発動！カードを二枚を墓地に捨て、レイヴンのレベルを４に上げる！そして墓地に捨てた暗黒界の武神　ゴルドと暗黒界の尖兵　ベージの効果を発動！自分フィールドに特殊召喚するぜ！」
俺様を自称することだけのことはあるのか、名も知らない先輩は一気に三体のモンスターをフィールドに並べた。ヒカルは侮っていたわけではないが、その評価を改めた。
「レベル４の暗黒界の尖兵　ベージに、レベル４となった魔轟神レイヴンをチューニング！来やがれ！魔轟神　ヴァルキュルス！カードを一枚セットしてターンエンド！」
「オレのターン、ドロー」
正直、あのトラップが除去カードじゃなきゃ勝ちは決まったな、とヒカルは思う。ヒカルのデッキはさっきと同じ、レアル・ジェネクス・クロキシアンを主軸に置いたコントロールデッキである。コンボさえ決まれば相手がどんなモンスターを呼ぼうと関係ない。
「オレは魔法カード、未来融合　フューチャー・フュージョンを発動。Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏを指定し、デッキからＤ－ＨＥＲＯ　ディアボリック・ガイとジェネクス・ウィンディーネを墓地に送る。墓地のディアボリックガイを除外し、デッキからディアボリック・ガイを特殊召喚。さらに手札のジェネクス・コントローラーを召喚する」
ヒカルにとってもこのデュエルの手札はこれ以上ないものだった。ならば、デッキの構築が勝敗を分かつ。
「レベル６のディアボリックガイに、レベル３のジェネクス・コントローラーをチューニング。来い、レアル・ジェネクス・クロキシアン。レアル・ジェネクス・クロキシアンの効果で魔轟神　ヴァルキュルスのコントロールを得る」

「な、なんだと！！？」
「レアル・ジェネクス・クロキシアンで、暗黒界の武神　ゴルドを攻撃」
ＳＥ☆Ｎ☆ＰＡ☆ＩＬＰ４０００→３８００
「魔轟神　ヴァルキュルスでダイレクトアタック」
「この瞬間！リバースカード！暗黒界へ続く結界通路を発動！墓地の暗黒界の武神　ゴルドを蘇生！」
「かまわない。ヴァルキュルスの攻撃をゴルドに変更」
ＳＥ☆Ｎ☆ＰＡ☆ＩＬＰ３８００→３３００
「よく耐えたな。カードを一枚伏せ、ターンエンド」
「ク・・ッ！オレ様のターン！！！魔法カード！手札抹殺！オレは手札を二枚捨て、二枚ドロー！さらに！墓地に捨てた暗黒界の軍神　シルバと魔轟神ルリーを特殊召喚！そして魔轟神レイヴンを召喚！効果で手札の魔轟神ルリーを墓地に送ってレイヴンのレベルを一つ上げ、墓地に送ったルリーは特殊召喚！レベル５の暗黒界の軍神　シルバとレベル１の魔轟神ルリー二体にレベル３となった魔轟神レイヴンをチューニング！来やがれ！俺様の最強モンスター！魔轟神レヴュアタン！」
赤と金の鎧をまとったモンスターがフィールドに出現する。
「レヴュアタンでヴァルキュルスを攻撃！」
奪ったヒカルの場のヴァルキュルスは破壊された。
ヒカルＬＰ４０００→３８００
「ターンエンドだ！どうだ！この俺様のモンスターが倒せるか！？」

ヒカルの手札には最初からミラクル・フュージョンがあった。前のターン、そのカードでＥ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏを召喚し、さらなるダメージを狙うこともできたのだが、戦力を残しておく意味で見送ったのだ。このターン、ミラクル・フュージョンを使い、アブソルートＺｅｒｏの自爆特攻、その効果でレヴュアタンを破壊することはできる。

「俺のターン」

だが、ドローしたカードを見て、ヒカルはその策をとるのをやめた。口元がニヤリと歪む。

「オレは手札から魔法カード、ミラクル・フュージョンを発動。墓地のジェネクス・ウィンディーネとディアボリックガイを除外し、Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏを融合召喚！そしてアブソルートＺｅｒｏで魔轟神レヴュアタンを攻撃！

「馬鹿か？テメェは。レヴュアタンの方が攻撃力は上なんだぜ？」

「ダメージステップに速攻魔法、イージーチューニングを発動。墓地のジェネクス・コントローラーを除外してアブソルートＺｅｒｏの攻撃力を１４００ポイントアップ！」

「なにっ！！！うわああぁぁぁぁぁ！！！！！」

ＳＥ☆Ｎ☆ＰＡ☆ＩＬＰ３３００→２４００

「そしてレアル・ジェネクス・クロキシアンでダイレクトアタック！」

「ぐあぁぁぁぁ！」

ＳＥ☆Ｎ☆ＰＡ☆ＩＬＰ２４００→０

ソリッドヴィジョンが消え、膝をついた先輩がヒカルをすごい形相で睨みつけている。勝負には勝者がいれば敗者がいる・・・・当然のことだ。ヒカルは無言で踵を返した。先輩はもう突っかかって

は来なかった。デュエリストとして最低限の誇りはあるのか、それとも単に取り巻きがやられたところを見てひるんだのかは分からないが。

デュエルのあとヒカルは夕食の買い物をし、徒歩で家に帰る。ヒカルはディスク同様自作したＤ－ホイールを持っているが、高価な物なのでそこらへんにおいて置いたらどんなことになるか分からない。悪戯されるならまだしも、持ち去られて解体される恐れもある。ということで、デュエルアカデミアへの通学には使えない。自分の部屋に厳重に保管し、休日に乗り回しているのである。

ヒカルの家はトップスのとある高級マンションだ。ヒカルの親が購入したものらしい。らしいというのは、ヒカルの親は彼が生まれてすぐに事故で他界しているからだ。ヒカルは親の顔など知らずに施設でデュエルアカデミア初等部になるまで過ごした。

無意味に豪奢なエントランスを抜け、エレベーターに乗る。ヒカルの家は階数で言えばちょうど中間くらいなのだが、そこを過ぎても降りず、最上階を目指す。最上階にはヒカルの知り合いが住んでいるのだ。

最上階にはその広いスペースをいっぱいに使ってペントハウスが立てられていた。玄関を空け、中に入る。

「ただいま」

ヒカルは置くまで聞こえるように少し大きい声で言った。

「あ！ヒカル！おかえり～！」

ヒカルの声に返事が返ってきて、すぐに奥から黄緑色の髪の少年が現れた。龍亞、このペントハウスの住人の一人である。

「今日選考デュエルの決勝だったんでしょ？どうだったの？」

「あぁ。勝ったよ」

「流石ヒカル！俺も見たかったな～ヒカルのデュエル。ヒカルって俺とはなかなかデュエルしてくれないんだもん」
龍亞は腕をブンブン振って楽しそうに話す。ヒカルはそれをほほえましく感じた。
「も～。そんなこと言ってヒカルさんを困らせないの。前にボロ負けして泣き出したの龍亞じゃん」
奥から龍亞にそっくりの少女が現れる。龍亞と双子の龍可だ。髪を後ろで縛っている龍亞と違って、両サイドで纏めている。
「龍可ぁ～。それは言わないって約束だろ？」
「はいはい」と龍亞はいいように流されている。
「じゃあ台所を借りるよ」
「あ、はい。今日もよろしくお願いします」
言い合いを続ける二人を横目に見てヒカルは台所に向かった。
何故、ヒカルがこんなことをしているのかと言うと、海外に出張する龍可と龍亞の両親に頼まれたからだ。二人の両親はヒカルのことを気に入っており、よく親のいないヒカルを食事に招待していた。
だが急遽仕事で海外に出張することとなり、龍可と龍亞に食事を作ってやってもらえないだろうかと頼みに来たのだ。世話になっている手前、ヒカルはむげに出来なかった。既にこの生活が数ヶ月続いており、今では勉強道具から着替えまでここに置いている。自分の家に帰るのは週末にＤ－ホイールを取りに行く、または掃除に行くときだけだ。
ちなにみ、今日の夕食は龍亞の希望によりカレーである。ヒカルはそれとポテトサラダを作ってリビングに運んだ。
「おぉ！うまそー！」
すぐに龍亞が近寄ってきて、ヒカルの手から自分の分の皿を取って戻っていった。そのあとに龍可も寄ってくる。
「もう・・龍亞ったら・・・・あ、今日もありがとうございます。運ぶの手伝いますね」
ヒカルは龍亞に彼女の分のカレーとポテトサラダを渡した。そし

て一緒に龍亞の待つリビングへ向かう。
「も～！遅いよ龍可、ヒカル～！」
龍亞はスプーンを机に打ち付けている。でも先に食べないあたり、やはり龍亞も人がいいんだろうなとヒカルは思う。
「はいはい」となんだか達観したような龍可の言葉を聞きつつ、龍亞の前にポテトサラダを置く。そして自分の席に着いた。ちなみにこの家の食事用のテーブルは一家団欒の為にか丸くなっていて、好きな場所に椅子をおくことができる。回転するところのない中華テーブルだと思って欲しい。
「「「いただきます」」」
そして三人で挨拶をし、食事を始めた。
半分くらい一気にカレーを書き込んだ龍亞がヒカルに声をかけた。
「ふあぶ！」
しかし、カレーが口いっぱいに詰まっていて上手くしゃべれないようだ。龍可から「行儀悪い」という突込みが飛ぶ。龍亞は急いで咀嚼して飲み込み、話し始めた。
「ヒカル！ヒカルの改造してくれたデュエルディスク、すごく使いやすかったよ！かっこいいし、皆にうらやましがられてさ！」
デュエルアカデミア支給のデュエルディスクは、市販の一般基準のものだ。成人用に作られているため、小学生には重いだろう。龍可と龍亞はそれ以外にもデュエルディスクを持っていたため、それを軽量化したのだ。
軽量化といっても、その実態は本気の改造に近い。強度は市販のものとは段違いだし、操作性もデザインも気を使った。
「うん。わたしも。そういえば先生が誰から貰ったのって聞いてきたから、高等部のヒカルさんですって答えちゃったけど・・・・もしかしたらなにか後で話が来るかもしれない」
その時、ポケットのＰＤＡが鳴った。あまり家に戻らない生活をしているので、家に電話があったときはこっちに連絡が来るようにしているのだ。

着信を見ると、デュエルアカデミアとある。早速きたかとヒカルは思う。
考えていてもしょうがないので、ヒカルは「Ｅｎｔｅｒ」を押して電話を取った。
「はい。水無月です」
（あ、水無月君ですか？私はデュエルアカデミア初等部のマリアというものですが、実は今日龍亞くんと龍可ちゃんが持ってきたデュエルディスクについてお話がありまして）
「何ですか？」
「ヒカル～！誰からなの！？」
電話中だが、龍亞が話しかけてきた。
「ちょっ！龍亞、電話中に声かけない」
（え！？龍亞くんに龍可ちゃん！？）
とりあえず、ハンズフリーにすることにした。ＰＤＡから大きく声が漏れる。
「え？マリア先生？」
（え？え？えぇ！？）
「あ、マリア先生、こんばんわ」
（えええぇぇぇぇぇぇ！！！！！）
そしていったん呼吸を置いた後、マリアは語り出した。
（・・・・コホン！えぇと、龍亞くんと龍可ちゃんはヒカル君と暮らしているの？）
「うん。お母さんとお父さんが海外に行ってるから、ご飯を作ってくれてるの」
（そうだったの）
「マリア先生は何でヒカルに電話かけたの～？」
（そうでした。ヒカル君には今日龍亞くんと龍可ちゃんが持ってきたデュエルディスクのことでお話があります）
「はい」
（あの小型のデュエルディスクはヒカル君からもらったとの事で

したが、本当ですか？）
「えぇ。正しくはオレが二人の家にあったデュエルディスクを改造したものです」
（ヒカル君はそんなことができるんですか）
「はい。一応それて食べてますから」
マンションの一室はヒカルの親が購入済みだが、税金は払っている。デュエルアカデミアの学費もあるし、食費もかかる。まぁ、食費に関しては龍亞と龍可の両親がほとんど出してくれているし、学費の方も親の財産からの引き落としだ。なにもしなくとも卒業するまでは持つだろう。
しかし、無くなるのをただ待っている筋合いはない。ヒカルは子供のころから趣味にしていたデュエルディスクいじりで稼ごうと考えた。中等部に上がるとともに、デュエルディスクの簡単な修理から始め、今ではＤ－ホイールの修理、ディスクのチューンアップを請け負うほどになっている。Ｄ－ホイールの製作とかはまだ来ないが。そしてそれで培った技術でヒカルのディスクとＤ－ホイールは作られている。
そう言った都合、ヒカルの家には防音室の中に専用の作業所が併設してあるが、室内だと空気がこもるのでそろそろ違う場所に専用の作業所を持つか、空調の強化を図りたいところである。
（そうなんですか。実はあのデュエルディスクがデュエルアカデミア初等部には必要だと思いまして）
まぁ、それは分かる。けどそれならオレに頼まなくてもいい気がする、とヒカルは思う。
「大量製造しろと？」
（はい。端的にいえばそうです）
「でもそれくらいならどこででもできる気がしますけど・・・・」
（それは・・費用の関係で・・・・）
なるほど。初等部は当初デュエルアカデミアにはなかったらしい。だが、デュエルの楽しみを伝えるためとか何とかでここ五年くらい

でできた。機材の多くが中等部、高等部からの流用のはずだ。まだそろえないといけないものも多く、既にあるものに時間もお金も割けないのだろう。まぁ、初等部は中等部や高等部に比べて基礎教育が多いのでそんなに問題にはなっていないようだが。

「話は分かりましたけど・・オレは基本学生で、その合間をぬってディスクの修理などを請け負っているのが現状です。正直そんな大がかりなものになると辛いのですが」

（・・・・そうですよね。それに予算の方もあまりありませんし）

「でもまぁ、龍亞や龍可のディスクみたいに本気で改造するならともかく、単なる軽量化ならすぐですから少しづつでいいなら」

もちろんそれはヒカルの腕が卓越したものだからである。ヒカルが大きな仕事を経験したことがないのは単にヒカルが若く、年齢故に敬遠されているからだ。

（ほ、本当ですか！？）

「えぇ、でも、働いた分の手当は貰いますけど」

（うっ・・・・）

「あ、それと上に話は通ってるんですか？」

（え？あ、はい。予算の範囲ならいいと確認はとってあります）

「その予算がどれくらいのものなのかは分かりませんが、オレが高等部を卒業するまでの学費の削減というのはどうでしょう。もちろんその予算の範囲内で構いません。それならやりやすでしょう？」

（え？それでいいんですか？）

「いいんですかと言われても・・・・結局オレにお金が入ってくるのは間違いないですよ？そういう方向でアカデミアの校長や理事と話し合ってみてください。とりあえず明日、予備のディスク軽くしてを龍亞たちに持って行かせますから」

（はい。分かりました。では、失礼します）

受話器が下りる音がし、電話は切れた。何だか龍亞が僕をキラキラした目で見つめている。

「うわ～、ヒカルはやっぱすげ～！」

「そうかな？」
「うん！だってデュエルは強いし頼りになるもん！」
とにかく、カレーを食べるのを再開する。ヒカルはその間に小型化したデュエルディスクの設計図を考えた。

プロローグ　選考デュエル決勝戦（後書き）

主人公のデッキはシンクロありのオリカだらけ「ＨＥＲＯ」デッキになります。今回のデッキはその先駆け？ちなみの現実ではこんなに簡単にコンボは決まりません。たいていの場合、数ターンの準備が必要です。

あんまり強い魔法・トラップカードはこの小説では禁止・制限カードとさせていただきます。　制限強化しないと使いそうな気分になるので、除去魔法・トラップ、帝、特殊勝利関連のカードは当小説内では大方のカードがが禁止ｏｒ制限ということにしました。相手が使ってくると思うと自分のデッキにも組み込んでしまうタイプなので。

主人公は日々「ＨＥＲＯ」可能性を追求している（という設定）。そんなヒカルの今回使ったデッキはこんな感じ。

上級モンスター　９枚
☆６　Ｄ－ＨＥＲＯ　ダッシュガイ×３
☆６　Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ×２
☆６　人造人間－サイコショッカー×２
☆６　ホワイト・ホーンズ・ドラゴン×２

下級モンスター　１５枚
☆４　ダーク・グレファー×３
☆３　クリッター×１
☆３　ジェネクス・ウィンディーネ×３
☆３　ジェネクス・コントローラー×３
☆３　ディープ・ダイバー×３
☆２　ゾンビキャリア×１

☆1　黄泉ガエル×1

魔法カード　13枚
思い出のブランコ×3
愚かな埋葬×1
サイクロン×1
増援×1
ディスティニー・ドロー×1
未来融合ーフューチャー・フュージョン×1
ミラクル・フュージョン×2
闇の誘惑×1
イージー・チューニング×1
禁じられた聖槍×1

トラップカード
王宮のお触れ×3

あんまり強いと思われるカードは抜いてあります。邪帝ガイウスとか死者蘇生とかブラックホールとか。あ、あとクロス・ソウルとか。

こんな感じの、ディープ・ダイバーによるデッキトップコントロールからレベル6闇属性モンスターの特殊召喚→レアル・ジェネクス・クロキシアンへと繋げるデッキです。準ガチ・・・なのかな？ファンデッキではないと思うのだけど。

これ「HERO」デッキじゃないじゃん！という突っ込みはなしの方向で。

主人公紹介（イラスト付きです）（前書き）

大学ノートに妄想が爆発。試しに投稿してみます。

主人公紹介（イラスト付きです）

名前：水無月ヒカル
身長：１７７ｃｍ
体重：６０ｋｇ

身体的特徴
髪は暗いエメラルドブルー。瞳は南国の海のような色。服も下の絵では線しかありませんが暗いエメラルドブルー。
身体は無駄なく鍛えられている（ライディングデュエルのラフプレイにひるまないため）。

説明
デュエルアカデミア高等部一年生。「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターを組み込んだデッキを使う。遊星同様機械の扱いに長けており、自分のデュエルディスクとＤ－ホイールは手作りのものである。
デュエルディスクは覇王十代をイメージしています。詳しくは下のイラストを参照してください。待機モードは埃が入らないように墓地とデッキの部分は閉じていて、起動するとカードを読み込む部分が（上から見て）時計回りに回転、一列に展開される。
オリカデッキはまだ紹介できません。話が進んだら別ページを作ります。

＞ｉ１５１２４－２０９９＜
＞ｉ１５１２５－２０９９＜
＞ｉ１５１２６－２０９９＜

主人公紹介（イラスト付きです）（後書き）

デジカメのハイライト設定を間違えた感がバリバリするので、機会があれば撮り直します。

第一話　サテライトの流れ星（前書き）

龍亞たちの住んでいるのはマンションではなく、ホテルの屋上に作られたペントハウスで、両親はもう長い間いないようです。でももう書いてしまったので、この小説内では半年前くらいまでいたことにします。まぁ、話にはあまり変化のない違いですし。

第一話　サテライトの流れ星

デュエルディスクを一つ余分に持った龍亞と通学カバンを背負った龍可が隣を歩いている。ディスクは昨日の内に軽量化しておいたものだ。ディスクをばらして組みなおしただけなので、別段ハイスペックというわけじゃないが軽量化前と比べて劣っているわけでもない。

校門から中に入ると、ヒカルは大勢に学生に取り囲まれた。校舎のほうをよく見ると、「水無月　ヒカル君、フォーチュンカップ出場おめでとう！」というのぼりが屋上からかかっている。昨日の今日でよくやるな、とヒカルは思う。悪い気はしない。

そしていつの間にか龍亞たちと離れてしまっている。周囲を取り囲んだ生徒が、ヒカルに一言二言かける。「期待してるぜ！」「デッキはもう決まっているの？」「フォーチュンカップにかける抱負を！」といった感じだ。ヒカルは律儀にそれに答える。

ヒカルが教室に着いたのは授業開始直前だった。龍亞たちはどうなっただろうと思ったが、大丈夫だろう・・歳のわりにしっかりしてるし、と結論付けた。

そして三時限目の授業の途中・・・・

（ヒカル君。校長室まで来てください。繰り返します。ヒカル君・・・・）

そう教室前のスピーカーから流れてきた。タッチパネル式の黒板に計算式を書いていた教師は眼鏡のフレームを押し上げ、こちらを向く。

「ヒカル君。何かやったのですか？」

「いえ、思いつきませんね。選考デュエルに勝ち抜いたのでそのことでは？」
「あ、そういえばそうでしたね。行ってきなさい」
ヒカルは一礼して教室を立ち去った。

昼間で授業中、誰もいない学校の廊下を歩くというのはヒカルにとって初めての経験だったので、やけに気分を高揚させしつつ校長室のドアの前に立つことになった。ヒカルはコンコンとノックをする。
「水無月ヒカルです」
「入りなさい」
ややあって、そう答えが返ってきたのでドアノブをまわして入室した。
室内には全校集会でおなじみの校長と見慣れない女性教師がいた。どんな集まりだ？とヒカルはいぶかしんだが、すぐに昨日電話を貰った女性教師かもなと結論を出した。
「なんの御用でしょうか？」
ヒカルは姿勢を正して校長に言う。
「そんなにかしこまらずともいいですよ。まずはこちらに掛けなさい」
校長はヒカルをソファに座るように促した。ヒカルはそれにしたがって黒光りするソファに腰掛けた。そして横の女性教師がヒカルの前に紅茶を置く。
「ありがとうございます」
校長がヒカルの前に座り、顔の前で手を組んで言う。
「さて、ヒカル君。君はデュエルディスクの改造を生業にしているということだったが、本当かね？」
やけに真剣な声で言う。もしかしたら、この学校はバイト禁止だったのだろうか？ヒカルは説明書に目を通さないタイプだ。もちろ

ん学生証にも目を通していない。ヒカルは背筋がぞくっとした。
「はい。両親が死去しているので、卒業後に慌てないために学費ぐらいは稼いでおこうと思いまして・・・・昔から趣味にしているデュエルディスクいじりを生かしてディスクの修理を主にやってますけど・・・・なにか不味かったですか？」
「いえ、そのことについては問題ありません。ウチは高等部以上のバイトは禁止していませんからね」
事実を述べれば、ヒカルのバイトは中等部から続いている。それは述べない方が身のためだな、とヒカルは思った。
「今日ヒカル君をお呼びしたのは、このデュエルディスクのことです」
校長はヒカルが昨日軽量化を行ったデュエルディスクを取り出した。なんの機能向上も考えず、ただ軽量化しただけのものだ。
「昨日、このマリア君から話が行っていると思いますが、初等部のデュエルディスクは準備が間に合っておらず、成人用のものを使っているのが現状なのです」
「えぇ。それは昨日聞きましたし、龍亞と龍可が重そうにディスクを持っていたので知っていました」
「そうです。成人用のデュエルディスクは規格ができていて数を揃えるのは簡単なのですが、いかんせん子供には重いですし、腕の太さも合わないので負担がかかります」
「そうでしょうね」
「このことについては前々から私も気にかけていました。しかし予算は少ない・・・・その時にマリア先生からある話を聞いたのです。龍亞君と龍可君がとても軽量なデュエルディスクを持っていると」
「それでオレにいきついたわけですね？」
「そうです。そして聞くところによるとヒカル君はデュエルディスクの修理や改造で生計を立てているとか」
生計を立てているというと語弊がある。実際は稼いだお金の大半

をデッキに使うカードの収集やホイールの改造費に当てている。
「子供用のデュエルディスクの規格というのは今のところありません。業者に頼もうにもそれほどの予算は今のところありません。そこで、あなたにお願いしたいのです。あなたにとっては今まで通り外部からの依頼を受けていたほうがいいのでしょうが、どうかこのデュエルアカデミア初等部のために、格安でディスクの軽量化をしてはくれないでしょうか」
校長はそう言って頭を下げた。律儀な人だ、ヒカルは感心した。
「頭を上げてください。報酬については俺が昨日言ったとおり、出来る範囲で卒業までの学費を割り引いてくれれば問題ありません。それと、ディスクの軽量化の作業に当てる時間として体育と音楽の時間を数が揃うまで免除して欲しいのですが」
「その程度でいいのなら喜んで。しかし学費を割り引くとなると予算の額のほうが大きいので実質免除になるでしょうね。残った予算はどうしますか？」
「そこまで守銭奴じゃありませんよ。集めたいカードも今は思いつきませんし、何かあったと気のためにとっておいてはどうですか？」
「・・・・恩に着ます」
「じゃあ、商談成立ということで、オレは授業に戻ります」
「はい。では各教科の先生には私のほうから言っておきます」
ヒカルはソファから立ち上がり、校長室を後にした。

そして五時間目の芸術選択・・ヒカルからすれば音楽の時間、ヒカルは音楽の先生に一声かけて工具がそろっているデュエルディスク管理センターにやってきた。受付の人がいたので声をかけてみる。校長が一声通していると思うが、念のためだ。
「１－Ｄの水無月ヒカルです。話は来ていますか？」
「あ、はい。しっかり来てますよ。ではこちらにどうぞ」

ヒカルは受付の女性に工具置き場に案内された。そして校長が早くも書類に起こした仕事内容を読み始める。
軽量化するデュエルディスクは４０個、実技は一度に二クラス以上重ならないからそれ以上は必要ない（一クラスニ十人程度）。軽量化が完了したものから初等部のディスクと入れ替えていくので、ペースはヒカル任せで問題ない・・・・とはいえ早いほうが好ましい。
とにかく、作業台を一つ借り、まずは工具で部品をバラす。そして昨日書いた設計図通りに基盤と外周部をカットし、丁寧に繋ぎ直していく。五時間目が終わるまでに二つは仕上げられそうだった。

そして六時限目の授業を終えた放課後、ヒカルは龍亞たちのペントハウスに帰ることなく、手に花を持ってある場所に向かう。街の中心にあるネオドミノシティ総合病院である。広大な敷地面積に多くの緑が植えられており、その清閑な外見は周りのビル群とは一線を隔している。
ヒカルは横を通り過ぎていく救急車を横目に見ながらエントランスに入り、受付に向かう。
「水無月ヒカルです。夏川スミレさんのお見舞いに来たのですが」
「あ、ヒカル君。いつもご苦労様。いいわよ、行ってらっしゃい！」
ヒカルは週に何回も病院を訪れる。受付の看護師とも軒並み顔なじみというわけだ。
「はい。失礼します」
ヒカルは歩くのを再開する。それを見ていた一人の看護師が、受付の看護師に声をかけた。
「ヒカル君・・また来てるんだ・・・・」

「えぇ・・・・不憫よね」
「でも、スミレさんは幸せね。あんなに想ってくれる人がいるんだもん」
「早く目を覚まして欲しいわよね・・・・」
看護師たちの話は長くは続かなかった。

ヒカルはとある一室の前で立ち止まった。ドアの横には夏川スミレの文字。ヒカルはここに用があるのだ。
ドアをスライドさせ、入室する。部屋にはベッドが一つ置かれており、少女が眠っている。ヒカルは花を生けた後ベッドに近づき、パイプイスを引っ張り出して腰掛けた。
「最近は来れなくて悪い・・・・選考デュエルで忙しくてな」
少女からの反応はない・・それはヒカルも承知の上だった。既に一年続いているやり取りだ。
ヒカルは少女を見る。少女の名前は当たり前だが夏川スミレ、薄い色合いの金髪を持つ、少し小柄な少女だ。ヒカルと同じ学年で、生まれは彼女の方が早いので年は彼女の方が一つ上である。
眠り続けている少女は、細くなった手足のせいでとても華奢に映った。もともと細かったが、ここ一年でさらに細くなった。
「まだ、スミレとの約束は果たせていない・・まだ、オレではとどかない」
ヒカルの顔が少し歪んだ。しかしすぐに持ち直し、ヒカルは無言でスミレの前に座り続けた。

＃＃＃

――――紅く燃えるデュエルアカデミア中等部・・・・
「なんでだ。なんでこんなことを」

瓦礫まみれの教室、ぐったりとしたスミレを抱え所々が破れた制服を着たヒカルが叫んだ。バチバチと爆ぜる炎の中でもその声は通る。

「五月蠅い！誰も・・・・私の気持ちなんて分からない！」

深紅の髪をした少女が慟哭するように叫んだ。その眼には涙を溜めている。その後ろには赤黒い色のドラゴンが控えている。

「そうかもしれない。でも昨日まではうまくやれてたじゃないか」

「昨日？そうね。でも、昨日と今日は・・・・もう違う！」

少女は後ろのドラゴンを見上げる。

「ブラック・ローズ・ドラゴン！！！」

体中から刺を生やした赤黒いドラゴンが動き出す。巨大な体が教室の壁を貫き、瓦礫を降らせた。

「ブラック・ローズ・フレア！！！」

赤黒いドラゴンから放たれた紫色の炎がアカデミアの天井を貫き、少女はドラゴンに掴まって飛んで行った。

そして瓦礫がヒカルとスミレ目がけて降ってくる。ヒカルは自分の身体の下にスミレをしっかりと隠し、衝撃を待った。

＃＃＃

無言で座っていたヒカルが動き、時計を見た。少し昔のことを思い出していたようだ。

「そろそろ時間か・・今日はもう帰るよ」

その時、ヒカルはドアがスライドする音を聞いた。そして四十歳くらいの男女が顔を出した。そして女性の方はヒカルを見た途端表情を厳しくして身体を硬直させる。

女性はカツカツとヒールを鳴らしながらヒカルに近づいた。そして・・・・

――――パン！！！

乾いた音が部屋に響く。女性は手を振り上げてヒカルに平手打ちをした。

「出てって頂戴！！！貴方のせいで！貴方があんな魔女と関わったせいでうちのスミレはっ！！！！！！」

女性はそこまで言って肩で大きく息をする。

そしてヒカルは言われたとおりに病室を出ることにした。いつもならあの男女、スミレの両親が来るのはもう少し後のはずだったのだが・・予定が狂ったようだ。ぶたれた頬はそう痛くない・・・・だがヒカルの心は悲鳴を上げていた。

病室を出てドアを閉める。そして一礼して立ち去ろうとした。しかし再びドアは開き、男性・・つまりスミレの父親が出てきた。ヒカルは何のようだろう、といぶかしむ。

「ヒカル君。ちょっと待ってくれるかな。少し・・話がある」

「・・はい」

「もう・・ここには来ないでくれないか？」

「・・・・・・」

ヒカルの心に二本目の楔が刺さる。心臓が止まりそうな緊張感がヒカルに奔った。

「純子（すみこ）はああ言ったが、私は君のせいだとは思っていない。むしろ、君はあの子を守ってくれたと救助隊の人から聞いている。そんな君にこんなことを言うのは本当に心苦しいが・・・・純子がああだ。君がここに来て、花を置いていくたびに純子は・・・・・・だから頼む！もうここには来ないでくれ！」

スミレの父親、九郎（くろう）は最後は語気を強めて頭を下げた。

「オレは・・あなたの許可を得てここにきています・・・・あなたにそういわれたら・・オレは、そうするしかない」

ヒカルはなんとかそれだけ言葉を搾り出した。

「・・・・すまない」

ヒカルは踵を返し、その場を立ち去る。そのヒカルの背中に九朗は頭を下げ続けた。

ヒカルは龍亞たちと夕食を食べ、デュエルディスクの軽量化をすると言って自分の家に戻ってきた。今日は自分の部屋で眠ると言ってある。だが、人の表情に敏感な龍可は何かを感じ取ったようで、終始自分を心配していたとヒカルは感じた。

部屋の中は静寂に包まれ、作業音だけが木霊する。集中力を増すことのできるこの静寂は、いつもとは違い気が狂ってしまいそうだった。

ヒカルは今日五つ目の軽量化を終え、一息つくことにした。

「分かってたことか。それに今始ったことじゃない」

ヒカルは病院で言われたことを思い出した。あれは初めて言われた言葉じゃなかった。今から一年弱ほど前、スミレがあの状態になった時にも言われた。

自分がある人物、黒薔薇の魔女と関わったせいでスミレがあなったというのは間違いではない。だが、どうするのが正しい選択だったのか渦中のヒカルにもそれは分からない。

「今は、スミレとの約束を叶える。それでいい・・・・」

今日はアカデミアの宿題をする気にはなれなかった。どうせ明日提出ではない、ヒカルは長らく使っていなかった自分のベッドで眠ることにした。目を覚ましたら約束のために動く、そう誓って。

・
・・
・・・
・・・・

・・・・・・
・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・

――――ｐｉｐｉｐｉ！ｐｉｐｉｐｉ！
電子音がヒカルの意識を覚醒させた。ＰＤＡのディスプレイが青白く光っており、着信を知らせている。画面を見ると龍亞たちからのようだ。
「なんだ？こんな時間に・・・・」
画面の左下にはａｍ１２：３０の文字。学生はもう寝る時間だ。まぁ、明日は休日なので問題はないが・・・・。
（大変なんだ！今すぐ来てよ！ヒカル！）
龍亞の声はずいぶんとあわてたものだった。
「何があったんだ？」
（今龍可とコンビニに行ってたんだけどさ！男の人が倒れてるんだ！）
「・・・・すぐに行く。場所はどこだ？」
（えぇと、ここは・・）
（ドラッグ大和の向いのコンビニの近くよ）
ヒカルはその龍可の言葉でだいたいの場所を理解した。このマンションから一番近く、よく利用するコンビニだった。考えてみれば当然の場所だと言えた。

「このほっぺの何だろ？」
龍可が運び入れた男の顔にある黄色の模様を見て言った。
路地で倒れていた男を運び込むのに、ヒカルは少々苦労した。自

分たちが住んでいるのはトップスの高級マンションである。そのウリの一つは厳重な警備であり、警備員が二十四時間交代で警備にあたっているのである。そしてトップすの入り口にはセキュリティまで常駐している。普段なら心強いが、今回男を運び込むには邪魔だった。

だが、そこは人のする警備、昔の人は言った。「人のすることに絶対はない」。ヒカルはドラッグ大和で売っていたファンデーションで男のマーカーをとりあえず見えないようにして、エントランスから酒に酔い潰れた先輩を開放する演技とともに、男は背負い、一緒にあったD－ホイールは手で押して、できるだけ自然な態度で警備を通過した。龍亞がなにか変なことを言わないか心配だったが、逆に子供がいたことで警戒が緩んだみたいだった。

そして龍亞と龍可のペントハウスに運んでソファに横たえたのだ。ちなみにファンデーションはもう落としてある。

「これはマーカーだよ。治安維持局に捕まったものには必ず付けられている、犯罪者の個人情報や居場所を特定するためのものだったはずだ」

「じゃあこの人って悪い人なの？」

「それは分からない。龍可、カードの精霊は問題ないと言っているんだろう？」

この男を発見してすぐ、D－ホイールからデッキを抜き出し龍可に調べてもらった。彼女にはカードと心を通わせる不思議な力がある。ヒカルも昔自分のカードを見てもらったが、「このカードたち、ヒカルさんに忠誠を誓っている」らしい。

龍可は机の上に置かれたデッキに手を置き、集中した。

「うん。このカード、とても大事にされてる」

当初、ヒカルはこの男を自分の部屋に運んで拘束するつもりだった。龍亞と龍可が助けたいといった手前、治安維持局に引き渡すようなことはしまいと思ったが、マーカーが付いている者に凶暴な人間が多いことも事実だからだ。

「じゃあ！いい人なんだよ！」
「も～龍亞、そんなこと分からないでしょ？」
「カードを大事にする人に悪い人なんていないよ！」
その龍亞の意見にはヒカルも納得だった。結局、カードを大事にできないものは人も大事にできないものだからだ。
カードの精霊たちは人の心に敏感だ。間違いなく、この男は「いい人」なのだろう。
「さあ、今日はもう寝よう。この人も目を覚まさないようだし、いつまでも起きていてもしょうがない」
大丈夫だとは思うが万が一があっても困るので、ヒカルは布団を引っ張り出してリビングで眠ることにした。

＊＊＊＊＊＊

そして次の日、ヒカルは窓から差し込む陽光で目を覚ました。そしてソファの男ももぞもぞと動きだす。
「う・・ここは・・・・？」
男は上体を起こして周囲を確認していた。そしてテーブルの上に置かれた自分のデッキを見つけ、確認している。
「起きたようだな」
同じくらいの年に見えたので、ヒカルはタメ口で声をかけた。
「誰だ」
「あなたをここに運んだ者だ。もっともここはオレの家じゃない。それとＤ－ホイールは後ろにある」

男は部屋の隅のＤ－ホイールを一瞥した。
「オレの名前は水無月ヒカル。呼び方はどうでもかまわない」
「俺は不動遊星」
ヒカルは早速だが頬のマーカーのことについて聞こうと思った。
だが、その時龍亞の声がペントハウスに響いた。
「あー！起きてる起きてる！」
龍亞は話をしていたヒカルと遊星に近づいた。
「ね！調子はどう？」
「あ、あぁ。問題ない」
遊星は意味が分からないといった感じでヒカルと龍亞、そして遅れてやってきた龍可を見ている。
「ここはトップスのこの子たちの家。オレはこの子たちの両親と仲良くしている下の階の住人だよ。その両親が海外に出張中なので、オレが調理師役としてここにいる・・・・といったところか」
「・・・・トップスだったのか」
遊星はソファから立ち上がって、Ｄ－ホイールに近づいていく。そして何か作業をしだした。
その遊星に龍亞が近づいて行った。
「ねぇ。名前はなんていうの？」
「遊星だ」
「遊星もデュエリストなんでしょ？デュエルしようよ！相手がいつも龍可でつまらなくってさ～」
「もう・・失礼しちゃう。龍亞だって弱いじゃん」
龍可はソファに座ってシレっと言った。
「これから強くなるからいいんだよ！」
龍亞は龍可に駆け寄っり、そして再び遊星の方を向いた。
「遊星、デュエルしようよ。デュエリストなら挑まれたデュエルは受けなきゃ！ちょっと待ってて！」
そう言って龍亞は自分の部屋に引っ込んでいった。デュエルディスクをとりに行ったのだろう。そしてすぐに戻ってくる。

「じゃーん！すごいでしょ、このデュエルディスク！ヒカルの手作りなんだ！」
「・・いいデュエルディスクだな」
遊星は龍亞の手にはまったデュエルディスクをまじまじと見てそう言った。
「分かった。やろう」
そしてＤ－ホイールについていたデュエルディスクを腕につけた。
「うわ～、かっこいい！そうなってんだ！」
そのまま戻ってきた遊星は壁に貼られているキング、ジャック・アトラスのポスターを見つけた。そして何か考え込む表情をしている。
「気になるのか？」
ヒカルは遊星に尋ねてみた。
「いや・・・・」
遊星はそう返すが、ヒカルは彼の顔が内に秘めた感情に歪むのを見て取った。だが、遊星に話す気はないらしい。ヒカルはそれならそれでいいと追及することはなかった。
「あ、それ俺の宝物なんだ。キングのグッズ！俺、いつかキングになってライディングデュエルするのが夢なんだ！」
「・・・・そうか」
「遊星もキング好き？」
「・・興味がないな」
遊星はジャック・アトラスのポスターから視線を外した。
「えぇ～！もったいない。せっかくライディングデュエルするのに・・・・あ、ちょっとこれ見て」
龍亞はレッド・デーモンズ・ドラゴンのフィギュアに立てかけてある封筒を手にとって遊星に見せた。
「デュエル・オブ・フォーチュンカップ？」
「こんどスタジアムで行われる大会に龍可が選ばれたんだ」
「私出る気ないから」

「もー。龍可はいつもそんなことばっかり。あ、この大会にはヒカルも出るんだよ。ヒカルはすっごく強いんだ！デュエル」

そしてそのあと龍亜と龍可がフォーチュンカップに出る、出ないで一悶着あったが、龍亞と遊星のデュエルが始まった。

・
・・
・・・
・・・・
・・・・・
・・・・・・
・・・・・・・
・・・・・・・・

「ダイナマイト・ナックル！！！」

ニトロ・ウォリアーの拳がディフォーマー・モバホンに炸裂し、龍亞のライフポイントは０になった。

「う、う・・うぅ・・・・」

龍亞は目じりに涙を溜めて悔しがっている。

「も～、すぐに泣くんだから。元気出せ」

龍可が龍亞に声をかけた。

「泣いてなんかない・・・・」

そしてたたずむ龍亜に遊星が近寄った。

「お前のデュエルは、ちょっと勝手すぎる。ディフォーマーを四体並べただけで満足していなかったか？ディフォーマーは表示形式で効果を変える特殊なモンスター。だが、その状況を変えてしまえるのも・・・・デュエルなんだ」

その言葉を聞いて、龍亞の目になにか力が宿った。

なんにしても、デュエルで負けて悔しがるのは真剣な証だ。ヒカルは龍亞に近づいて一枚のカードを差し出した。この前買ったパックで四枚になったカードだ。

「ジェネクス・ニュートロン？」

「あぁ。機械族モンスターのシンクロ召喚をサポートするカードだ、龍亞のデッキとも相性がいいと思う」

「・・・・貰っていいの？」

「あぁ。龍亞が真剣な眼をしていたからね。大事に使ってくれよ」

「うん！」

龍亞はヒカルからもらったカードを大事そうにデッキの中に入れた。

「あ、俺、ヒカルと遊星のデュエルも見てみたいな！さっきも言ったけど、ヒカルも強いんだ！遊星にも勝っちゃうかもね！」

ヒカルは遊星がここに居づらそうにしていることを察していた。人柄がどうあれマーカーが入っているということはそれだけでセキュリティに追われる要因となる。迷惑をかけたくないんだと思う。だが、ヒカルも遊星とデュエルしてみたかった。カードを信じて正々堂々を戦うデュエリストは、いないわけではないが珍しい。デュエルアカデミアであってもデュエル前に相手のデッキを盗み見たりという者は存在する。

「どうする？オレは不動と戦ってみたい。それに龍亞のためにもなるだろうし」

「あぁ、分かった。しよう」

「じゃあオレはデッキとデュエルディスクを取ってくる。それまでにデッキの用意をしておいてくれ。さっきのデュエルでオレは不動のデッキを見てしまったから」

「あぁ。それと、俺のことは遊星でいい」

「分かった。じゃあ遊星、行ってくる」

そしてヒカルはすぐに戻ってきた。本来のヒカルのデッキは今、手作りのデュエルディスクにおさまって彼の家のＤ－ホイールにくっついている。だがヒカルのカードの大半はここ、龍亞と龍可の家に置いてある。今回はその中の一つを使うつもりだ。取りに行ってもいいが、あまり待たせるのもしのびない。

そして龍亞と遊星がデュエルしたプールのほとりで向かい合う。

「「デュエル！！」」

ディスクがランダムに決定した先攻はヒカルの方だった。

「オレのターン、ドロー。オレはコアキメイル・ロックを召喚。カードを二枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターン、ドロー！スピード・ウォリアーを攻撃表示で召喚。このカードは召喚に成功したターンのバトルフェイズ時、攻撃力が倍になる。コアキメイル・ロックを攻撃だ」

攻撃力１８００となったスピード・ウォリアーに１２００のコアキメイル・ロックは敵わない。だがヒカルは落ち着いている。

「トラップカード、ガードブロックを発動。戦闘ダメージを無効にしてカードを一枚ドロー」

だが、発動したカードは破壊を無効にするわけではない。コアキメイル・ロックは破壊される。しかし、ヒカルの狙いはコアキメイル・ロックが戦闘で破壊されることだった。

「コアキメイル・ロックが戦闘で破壊され墓地に送られた時、デッキからレベル４以下の「コアキメイル」と名のついたモンスターカード一枚を手札に加える。オレはコアキメイル・ガーディアンを手札に加える」

「カードを一枚伏せ、ターンエンド」

「俺のターン。オレはビッグ・ピース・ゴーレムを召喚。このカードは相手フィールド上にのみモンスターが存在するとき、リリースなしで召喚することができる」

隣で見ている龍亞が、「あー！キングのカードだ！」と目を輝かせている。このデッキは別にキングのファンデッキではない。意味があってこのカードはこのデッキに入っている。
「バトル、ビッグ・ピース・ゴーレムでスピード・ウォリアーを攻撃」

遊星ＬＰ４０００→２８００

「くっ！」
「カードを一枚伏せ、ターンエンド」
「俺のターン、ドロー！」
遊星は引いたカードを確認した瞬間、心の中で「来た！」と叫んだ。
「オレはチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚。このモンスターの召喚に成功したとき、墓地からレベル２以下のモンスターを特殊召喚できる。来い！スピード・ウォリアー。レベル２のスピード・ウォリアーにレベル３のジャンク・シンクロンをチューニング！集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！シンクロ召喚！いでよ、ジャンク・ウォリアー！」
遊星の場に、紫色の機械の兵士がシンクロ召喚された。
「ジャンク・ウォリアーでビッグ・ピース・ゴーレムを攻撃！スクラップ・フィスト！」

ヒカルＬＰ４０００→３８００

「モンスターが戦闘で破壊されたとき、このトラップカードを発動することができる。トラップカード、ヒーロー・シグナル。デッキからレベル４以下の「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターを特殊召喚することができる。オレはその効果でデッキからＥ・ＨＥＲＯ　エアーマンを召喚、そしてこのモンスターが召喚、特殊召喚

に成功したとき、デッキからＥ・ＨＥＲＯと名のついたモンスターを一枚、手札に加えることができる。その効果でＥ・ＨＥＲＯ　マリシャス・エッジを手札に加える」

「俺はカードを一枚伏せ、ターンエンド」

遊星はヒカルのデッキを量りかねていた。始めはジャックのファンデッキか何かかと思っていたが、今のターン、「Ｅ・ＨＥＲＯ」が飛び出してきた。「Ｅ・ＨＥＲＯ」は融合によって真価を発揮するカード群である。だが、今まで使われたのはコアキメイル・ロックとビッグ・ピース・ゴーレム・・・・確かに地属性ならば融合素材にはなるが、わざわざ採用するカードとは思えない。遊星は真剣に相手の出方を窺うのだった。

「オレのターン」

やはり上手い、とヒカルは思う。遊星のデッキは下級モンスターを軸にしたシンクロデッキだが、その効果でお互いをフォローし合い、モンスターが破壊されてもすぐに切り替えしてくる。

「オレはＥ－ＨＥＲＯ　マリシャス・エッジをアドバンス召喚する。このモンスターは相手フィールドにモンスターが存在する時、リリース一体でアドバンス召喚を行える」

一方、遊星はヒカルのデッキをいぶかしんだ。確かに今召喚したモンスターは自分のジャンク・シンクロンの攻撃力を上回っている。あの悪魔族モンスターでは「Ｅ・ＨＥＲＯ」の融合召喚は行えない（Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏだけは「Ｅ・ＨＥＲＯ」以外の「ＨＥＲＯ」でも融合召喚を行える）。

岩石族モンスターに悪魔族の「ＨＥＲＯ」・・・何かが遊星の頭の中に引っかかる。たしか、その条件を満たしているカードがあった気が・・・・。

「バトル、マリシャス・エッジでジャンク・ウォリアーを攻撃」

「トラップカード、くず鉄のかかし。マリシャス・エッジの攻撃を無効にする」

「ターンエンド」

とにかく、今はあのモンスターを倒さなければ、と遊星は気を取り直した。引いたカードは突進。
「ジャンク・ウォリアーでマリシャス・エッジを攻撃だ！スクラップ・フィスト！」
「攻撃力はマリシャス・エッジの方が上だが・・・・」
「魔法カード、突進。ジャンク・ウォリアーの攻撃力を７００ポイントアップする」
「そう来たか。速攻魔法、禁じられた聖杯。マリシャス・エッジの攻撃力を４００ポイントアップする」
ヒカルは最初のターンから伏せられていたカードを発動させた。これで攻撃力は互角。お互いのモンスターが破壊された。
「シールドウィングを守備表示で召喚し、ターンエンド」
「オレのターン、ドロー」
ヒカルはドローしたカードを見た瞬間、口許を少し吊り上げた。その様を見て、遊星の頭の中に浮かんできたものがある。そうだ、ある。岩石族と悪魔族から召喚されるモンスターが。デッキの構築は難しいが、一度呼び出せば戦況を覆してしまうカードが。
「オレは魔法カード、ダーク・フュージョンを発動」
「ダーク・フュージョン？」
聞きなれないカードに龍亞が疑問符を浮かべた。
「悪魔族専用融合カードのことだ。融合に比べてデッキから引っ張って来ることが難しく、召喚するモンスターも悪魔族限定で使いにくいが、このカードでのみ、融合召喚することの出来るカードがある。手札のダーク・リゾネーターとコアキメイル・ガーディアンを融合。来い！Ｅ－ＨＥＲＯ　ダーク・ガイア！ダーク・ガイアの攻撃力は融合素材としたモンスターの攻撃力の合計となる」
「えぇぇと、ダーク・リゾネーターの攻撃力が１３００で、コアキメイル・ガーディアンが１９００だから・・・・」
「３２００でしょ？」
指折り数えていた龍亞を龍可が嗜めた。

「ダーク・ガイアでシールド・ウィングを攻撃、このモンスターは攻撃宣言時、相手フィールド上のすべてのモンスターを攻撃表示に変更できる。ダーク・カタストロフ」
シールド・ウィングの攻撃力は０。この攻撃が通れば、そのダメージは遊星のライフを上回る。
「トラップカード、くず鉄のかかし！」
遊星はデュエルディスクのボタンを押すが、くず鉄のかかしは発動しない。
「ダーク・フュージョンによって融合召喚されたモンスターは、そのターン魔法・トラップ・モンスター効果の対象にならない。よって発動条件を満たせないくず鉄のかかしは発動しない」
「ならば！トラップカード、スピリット・フォース！戦闘ダメージを０にし、墓地から戦士族のチューナー一枚を手札に加える」
「サイクロンでクズ鉄のかかしを破壊し、ターンエンド」
ヒカルの手札はそういいわけではない。Ｅ・ＨＥＲＯ　プリズマーに融合呪印生物ー地の二枚。やはり融合は手札の消費が激しい。次のターン、ダーク・ガイアが破壊されたら起死回生の手は今の手札にはない。
「俺のターン！手札から魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動！手札のモンスターカード一枚を墓地に捨て、デッキからレベル１のモンスターを特殊召喚する。俺はチューニング・サポーターを特殊召喚。さらに手札のジャンク・シンクロンを召喚！その効果で墓地のスピード・ウォリアーを特殊召喚する。そしてワン・フォー・ワンの効果で墓地に送ったボルト・ヘッジホッグを特殊召喚。レベル１のチューニング・サポーターに、レベル３のジャンク・シンクロンをチューニング。シンクロ召喚。いでよ、ジャンク・ウォリアー！ジャンク・ウォリアーの効果発動。このモンスターのシンクロ召喚に成功したとき、自分フィールドのレベル２以下のモンスターの攻撃力の合計分、このモンスターの攻撃力をアップする」
ジャンク・ウォリアーの攻撃力が４０００にアップする。そして

ヒカルの手札に起死回生のカードはなく、フィールドに伏せカードもない。
「さらに、チューニング・サポーターの効果発動。このモンスターがシンクロ召喚に使用され墓地に送られたとき、デッキからカードを一枚ドロー！装備魔法、団結の力をジャンク・ウォリアーに装備。俺の場のモンスターは四体、よってジャンク・ウォリアーの攻撃力は３２００ポイントアップ！」
ヒカルの場に伏せカードはない。攻撃力が７２００ポイントまで上昇したジャンク・ウォリアーの攻撃を防ぐことは叶わない。
ヒカルは自分がプレイングミスをしたことを自覚した。前のターン、サイクロンでくず鉄のかかしを破壊せず、このターンに団結の力に使っていればこのターンを乗り切ることができたはずだ。
「ジャンク・ウォリアーでダーク・ガイアを攻撃！スクラップ・フィスト！！！」
ジャンク・ウォリアーの拳がダーク・ガイアに迫る。ヒカルはカードを握る手の力を抜いた。

ヒカルＬＰ３８００→０

ソリッド・ヴィジョンがゆっくりと消え、デュエルの余韻が周囲を支配した。その中で口を開いたのはヒカルだ。
「オレの負けか」
「あぁ。だが強かった」
遊星はヒカルを称賛する。融合による手札の消費を補うデッキ構成に、落ち着いたプレイング。一歩間違えば自分は負けていただろうと思った。
「負けちゃったね、ヒカルさん」
ヒカルの隣に龍可が寄ってきてそう言う。龍亞の方は遊星の方に走っていき、周りをぐるぐる回っている。
「あぁ。強いな、遊星は」

そのあとヒカルたちは全員で昼食をとり、夜までデュエルのことを語り明かした。
そしてその夜・・・・昨日と同様リビングに敷いた布団に寝ていたヒカルは何者かの足音を感じ取った。
「行くのか？」
それはペントハウスを出ていく遊星のものだ。
「俺がここにいてはヒカルたちに迷惑をかける」
「そうか。龍亞たちは寂しがるだろうが遊星が言っていることも分かる。遊星にこの街はやりずらいだろうけど、しっかりな」
「あぁ」
遊星は赤いＤ－ホイールを引きながら去って行った。リビングを静寂が支配する。ヒカルは布団をかぶり、眠ることにした。

第一話　サテライトの流れ星（後書き）

今回のヒカルのデッキは正統派【ダーク・ガイア】でした。ジャックのカードが少し入っているあたりに遊びがありますが。あーでも、プリズマーから墓地に送れるビッグ・ピース・ゴーレムは便利なので完全に遊びとは言えないのか。

【ダーク・ガイア】強い！遊星を勝たせるのが大変でした。それで最後が投げやりな展開に・・・・。

上級モンスター　６枚
☆７　Ｅ－ＨＥＲＯ　マリシャス・エッジ×３
☆５　ビッグ・ピース・ゴーレム×３

下級モンスター　１５枚
☆４　Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン×１
☆４　Ｅ・ＨＥＲＯ　プリズマー×２
☆４　コアキメイル・サンドマン×１
☆４　コアキメイル・ガーディアン×１
☆４　コアキメイル・ウォール×１（海外カード）
☆４　コアキメイル・ロック×２
☆３　融合生物×２
☆４　ニュート×２
☆３　ダーク・リゾネーター×３

魔法カード　１１枚
ダーク・フュージョン×２
ダーク・コーリング×３
未来融合－フューチャー・フュージョン×１（制限）※永続

封印の黄金櫃×１（この小説内では制限）
サイクロン×１（同上）※速攻
ハリケーン×１
禁じられた聖杯×２※速攻

トラップカード　８枚
ヒーロー・シグナル×２
トラップ・スタン×３
ガード・ブロック×２
リビングデッドの呼び声×１（制限）※永続

ダーク・リゾネーターはタッグフォースで作った僕のデッキにも入っています。速攻性はないですが、相手モンスターの数や攻撃回数をコントロールすることで帝のアドバンス召喚につなげられて便利でした。それに【ダーク・ガイア】のエクストラデッキからシンクロモンスターが飛び出てくるのはニヤリとします。ロマンです。
デッキ構成の都合上、召喚の多くなるレベル７のシンクロモンスターにはこれまた都合よくデーモン・カオス・キングがいますし。

第二話　黒薔薇の魔女

さて今日も昨日に引き続き休み。週休二日は色々と物議を呼んでいるが、今のように忙しい時にはありがたい。

午前中、ヒカルはデュエルディスクの軽量化の作業を進めていた。そしてそれもひと段落し、彼は今ネット・サーフィンをしている。自分の使うカードの細かいルールを調べるためである。これがヒカルは結構楽しかった。

そしてヒカルは気になるウェブページを見つけた。「黒薔薇の魔女・出現スレ」と書かれている。ヒカルはカーソルを合わせてクリックした。

黒薔薇の魔女――半年ほど前からネオドミノシティのいたるところに現れる、植物族デッキを使うデュエリストのことである。ただ、神出鬼没で現れる回数も多いとはいえないため、都市伝説化している。

曰く、魔女の使うカードはソリッド・ヴィジョンなのにダメージがある。黒薔薇の魔女とデュエルしたデュエリストはこの世から消える。闇のデュエリストである。と、様々なことが書かれている。

ヒカルは彼女のことを知っている。一年前まで一緒にアカデミアで学んでいた生徒で、ヒカルと、そして今は眠っているスミレとは友人の関係にあった。そして彼女はデュエルでのエフェクトを現実のものとする、サイコパワーの持ち主でもある。それも強大な。当時アカデミアで一緒だった頃から彼女はそのことについて酷く悩んでいた。

このスレでは視聴者を煽るようなことが多く書かれているが、その実態を知っているヒカルからしてみれば危険なことこの上ないことだった。彼女には面白半分で関わってはならない。デュエルを挑

む方も危険だし、何より彼女がさらに苦しんで憎悪の感情に沈んでいくことになる。
スレを下まで読んでいくと、どうやら最近はダイモンエリアで比較的多く確認されているらしい。もっとも、そこに行ったところで出会えるとは限らないし、そこに彼女がいたとしてもヒカルはアカデミア時代の友人ということでアルカディア・ムーヴメントから危険視されている。
よって迂闊な行動は出来ない。黒薔薇の魔女のことを追っているとアルカディア・ムーヴメントに思われでもすれば、ヒカルは亡き者にされてしまうかもしれない。
強いサイコパワーを持つものには甘い言葉を囁き、それ以外のものはなんとも思わない。邪魔になるならいかなる手段をよういても排除する。あそこはそういうところだ。
とにかく、今はやることがある。ヒカルはウェブページを閉め、作業台に向かう。しかし、それを呼び止めるようにPDAが着信を告げた。
「はい。水無月ですが」
(あ、ヒカル？俺だよ、龍亞だよ)
「龍亞か。どうしたんだ？」
(今からダイモンエリアに行こうと思うんだ！魔女をやっつけるんだ！ヒカルも一緒に行く？いやー、天兵と話しているときヒカルの話が出てさぁ)
龍亞の言葉を聞いて、ヒカルは肩をビクッと震わせた。
ダイモンエリア、黒薔薇の魔女の出現情報が多いと、さっき見たウェブページで語られていた所だ。まさか行ったその時に現れるとも思えないが、もしもと言うこともありえた。止めるのが最もいい選択だろう。
「分かった。オレも行くよ。ちょうど一息入れようと思っていたところだしな」
だが、ヒカルはついていくことを選択する。ヒカルはもう一度、

彼女に会わなければならない。可能性は低いが、もしかしたらということもある。

龍亞と龍可、そして龍亞の友人である早野天兵と合流し、ヒカルはダイモンエリアへ足を運んだ。龍可ははじめは渋っていたが、ヒカルが行く言うと、それならいいかとついてきた。

トップスと比べて埃っぽく、マーカー付きの者が普通に歩いている。いくらか法もゆるく、こういうところの方が過し易いと感じる。また、ヒカルにとってここは始まりの場所でもあった。

ヒカルが幼かった頃、親の顔も知らないうちに施設へ預けられ、遺産は親戚もいないということで治安維持局で保管されていた。もちろんのこと、孤児を引き取る施設にお金の余裕があるわけではなく、ヒカルはカードを得るためによくここに足を運んでいた。

ここにはよくカードが捨てられる。もちろん、強いカードが手に入るということはほとんどない。だが、効果モンスターからの大量展開からシンクロ召喚につなげるのが主体となったことで融合モンスターはそこそこ手に入るのだった。

ヒカルは幼い頃、ここで拾ったモンスターを主軸として《E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン》をフィニッシャーにした【融合HERO】デッキを使っていた。時代遅れといささか馬鹿にされていたが。

そしてアカデミア（中等部）に入学してからも足しげくここに通い、関連カードを集め、デッキを強化していったのである。

ヒカルの左手にはカードを読み込む部分が五方向、ヒトデのように配置されたデュエルディスクをつけている。待機状態のディスクにはデッキが中に格納されていて、セメタリーも埃が入らないように閉じていた。

今回持ってきたデッキはヒカルがフォーチュンカップで使おうとしているデッキであり、今回、万が一黒薔薇の魔女と会ったときは使おうと思っていた。
このデッキには世に出回っていないカードが入っている。このデッキのカードはここからさらに奥、人もあまり寄り付かない非開発地区で拾った。海馬コーポレーションのロゴの入ったカプセルに入れられて、廃墟と化した地下道に安置されていたのだ。そして試しにデュエルディスクで読み込んでみたら使えるではないか。そしてヒカルはそのカードたちを持ち帰ったのだった。
しばらくあたりを散策し、特に変わったものもないので露店を見ていたヒカルだったが、最近見た後姿を雑踏の中に見つけた。龍亞もそれに気づいたようで、その人物の方へ走って行った。
「遊星！」
振り返ったのは左頬にマーカーのある青年、遊星だった。そのまわりにはやけに大柄の男と、白髪の老人がいる。
「龍亞！？何でこんなところに」
「黒薔薇の魔女とデュエルしに来たんだ！」
「黒薔薇の魔女？」
遊星はどうやら黒薔薇の魔女を知らないらしい。サテライト出身らしいから無理もないのかもしれない。ヒカルたちも遊星に近づいた。
「こいつらは何なんだ？遊星」
遊星の後ろにいた大柄な男が言う。
「龍亞に龍可、それとヒカルだ。倒れていたところを助けてもらった」
「そうだったのか。俺は氷室　仁だ。よろしくな」
氷室はヒカルに右手を差し出した。ヒカルはその手を握る。
「オレは水無月ヒカル。よろしく」

その後、魔女が現れることもなく日が紅くなり始めた。龍亞と天兵は遊星とデュエルの話に夢中で魔女なんてもうどうでもよさそうだった。龍可はヒカルにデッキの相談をしている。
そしてそろそろ帰ってご飯の支度をしようかと思い始めた頃だった。

――――ドオォォォォン！！！

突如爆発音が轟き、突風がヒカルたちの髪をなびかせた。
ヒカルは突風の吹いてきた方向に顔を向ける。ヒカルの目に飛び込んできたのは猛々しく吼える赤黒い龍の姿。一年前、デュエルアカデミア中等部を破壊した《ブラック・ローズ・ドラゴン》だった。

「うあぁぁぁぁ！！！魔女だーーー！！！」
「逃げろぉぉぉ！！！」
「た、助けてくれーーー！！！」

ヒカルたちの周囲は阿鼻叫喚の騒ぎとなる。その場にいた人すべてが中心、《ブラック・ローズ・ドラゴン》の方から逃げてくる。ヒカルは暴徒と化した人たちに龍亞と龍可が踏み潰されないように背後に隠す。
そしてすぐにその場にはほとんど人がいなくなる。ヒカルたちは黒いローブを着て怜悧な仮面をつけた魔女と向かい合う。
「「あ、あ・・あぁ」」
龍亞と天兵は恐怖に足がすくんで動けないようだ。
「ぐ・・・・っ！！！」
遊星は右手を押さえてその場にうずくまった。赤い光が腕から漏れている。そして魔女の右腕からも同じような光が出ていることが確認できる。それは赤い痣だ。ヒカルは彼女の腕にそれがあることを知っていた。

――――殺せ・・

その痣を見た瞬間、ヒカルの頭に声が響く。それはヒカルの意志まで操り、ヒカルを破壊にいざなっているように感じた。殺せ？誰をだ・・・・考える必要もないか。ヒカルの目は赤い痣に向いている。それから目を話すことができない。あれを殺せ、この世から追放しろ。そう、何かがヒカルに語りかけている。

「ぐ・・・・・」

ヒカルは頭を振って意志を取り戻した。頭蓋骨の中に鉛でも詰まっているかのような疲労感があるが、ヒカルは足に力を入れなおし、黒薔薇の魔女に向き直る。

一方、黒薔薇の魔女は遊星の右腕に現れた痣を見て少し顎を引いた。

「・・っ！忌むべき印だ！！！」

再び突風が周囲に巻き起こる。一瞬、黒薔薇の魔女とヒカルの視線がぶつかる。

「・・・・っ！」

黒薔薇の魔女はヒカルから視線を外す。そしてそのまま去っていった。

ヒカルの心は歓喜に満ちていた。ヒカルはずっと黒薔薇の魔女、十六夜アキと会う機会を狙っていたのだ。居場所は分かっていた・・・・アルカディア・ムーヴメント、アカデミアを破壊し、どこに行ったかと思いきやサイコデュエリストを軍事利用しようと考えている組織に入るなんて最高の皮肉だ。

今回はわずかな時間顔を合わせただけだったが、アルカディア・ムーヴメントの指示を受けて動いているのならヒカルと会うことはなかっただろう。彼女が自分の判断で行動でき、こうしてたまに外を出歩いていると分かっただけでも前進した。

遊星の腕に現れ、アキの腕にも合った痣。アキはアカデミア時代から痣を苦々しげに見ていた。あれは一体何なのだろうか。痣があっても遊星にサイコデュエルの力はない。アキはあの痣を自身のサイコデュエルの力の源と考えていたようだが、それは違う。あれはもっと他の何か。

そしてヒカルの頭の中に響いた声、とてつもない引力で彼を破壊に向かわせようとする意志を感じた。ヒカルにはあれが何なのかなど分からない。一年前、どれだけアキのあの痣を見ようともこんなことになることはなかった。いったい、自分の身に何が起こっているのか、それも考えなければならないと思った。

周囲は沈黙が支配している。まぁ、あれだけのことがあれば無理もない。

「あれは・・・・」

そしてその沈黙を打ち破ったのは遊星だ。

「驚いた。あんちゃん、シグナーだったのかい？」

アキの登場で腰を抜かしていた老人が遊星の右腕の痣を見て言う。シグナー、ヒカルは初めて聞く言葉だった。

「シグナー？」

遊星もその言葉に聴き覚えがないらしく、聞き返していた。

「昔旅をしていたときに聞いたんだよ。赤き龍に選ばれた五人の戦士の話を」

――老人の話によると、この世界を守っている赤き龍と呼ばれる存在がいて、五千年周期で何者かと争っているらしい。詳しくは老人も知らないらしいが、とにかくシグナーには彼らを守る龍がついているらしい。

「・・・・・・」

遊星はその言葉を聞いて何かを考えているようだ。どこか気になるところがあったのだろうか。

そしてヒカルたちはその場で解散した。

＊＊＊＊＊＊

そしてフォーチュンカップの日が訪れた。
ヒカルは専用に用意された控え室で呼び出されるのを待っている。これから開会式が行われるのだが、観戦者はおろか選手にも対戦するデュエリストの情報は明かさないということでこうして一人一人違う控え室で待機させられている。
ちなみに龍可は出ないらしい。代わりに龍亞が変装して参加することになった。
「水無月ヒカルさん。時間になりました。ついて来てください」
控え室のドアが開き、係員の男が入ってきた。
そしてヒカルが案内されたのは昇降機の下だ。これで出場者の八人全員がスタジアムに上がるのだろう。今はパネルで仕切られているが、すぐ隣には出場者がいるはずだ。
「ここで待っていてください。時間がきたら昇降機が上にせり上がりますので」
「はい。分かりました」
ヒカルがそう答えると係員の男は足早に去っていった。そしてヒカルは昇降機の上に立つ。
しばらくすると隣の昇降機が作動する音が聞こえた。次々と選手がスタジアムに上がっていっているようだ。そしてヒカルの昇降機も動き出した。
天井が開き、スタジアムの音が聞こえてくる。
「そして七人目はデュエルアカデミアからの参加だ！アカデミア

で行われた厳しい選考デュエルに勝ち抜き！このフォーチュンカップの出場権を勝ち取ったデュエリスト、若き期待の光！水無月ヒカルーーー！！！」

リーゼントに赤いスーツという特徴的ないでたちをした男性が高らかにヒカルの名を呼ぶ。それに続いて観客たちの歓声がスタジアムに響いた。

ヒカルは周りを見回す。そして出場者の内には見たことのある顔があった。それは龍亞ではない。一年前まで同じ学び舎で学んでいた少女、十六夜アキだ。向こうはこちらを見て目を丸くしている。

ヒカルは五日ほど前と同じく歓喜した。まさかこうも早く彼女に再開する機会があるとは思ってもいなかった。この大会に参加したのは無意味ではなかったわけだ。ヒカルの探していたモノ、それは彼女だからだ。

「そして最後の出場者は――――」

ヒカルの隣の地面がパックリと開き、黒髪に金のメッシュの入った特徴的な髪型の青年が出てきた。

「サテライトの流れ星！不動遊星ーーー！！！」

最後の参加者は遊星だった。前に会ったときは招待状を持っていなかったようだが、何かあったのだろうか。

何にしても、マーカー付きの男が出てきたことで観客は面白くなさそうだった。スタジアムに緊張が満ちていく。

曰く、「マーカー付きが出るくらいなら俺を出してくれよ」「汚らわしい」「引っ込めマーカー付きが」自分たちを崇高な存在と言いたいのだろうが、ヒカルの目から見れば、いやまともな人間の目から見ればその様はみっともないことこの上なかった。

龍亞はずっと遊星とスタジアムの様子を見て目を右往左往させているし、司会者の男もスタジアムの様子に怯んでいるようだ。

やがて色黒でガタイのいい男が進み出て司会者のマイクを奪った。

「ここに集まっている観客の皆様、どうか聞いて欲しい。私はボマー。このたびフォーチュンカップ出場者に選ばれたデュエリスト

の一人だ。マーカーが付いている男が出てきて戸惑っているのは分かる。だが、この男もまた私と同じ選考条件で選ばれたデュエリストの一人なのだ。それにマーカー付きだといってデュエルには何の関係もない。私はそれを理由にこの者を否定する皆様の心こそ、真に治すべきところだと考える」

ボマーは強い口調で客たちに語りかけた。観客たちは彼の言葉を聞いておとなしくなる。そしてその静寂の中、パンパンパン！と拍手の音が響いた。

出てきたのは治安維持局長官、レクス・ゴドウィン。フォーチュンカップを企画した本人である。灰色の髪を後ろで束ね、手を後ろで組んで歩いてきた。

「素晴らしい言葉でした。この大会は、その者の出自に関わらず力のあるデュエリストを選出してあります。彼も言った通り、デュエルにはマーカーなど関係ありません。真に強いデュエリストは誰なのか、それを決定するためにこの大会は開かれているのです。ここにお集まりの皆さんも必ずや満足していただけると考えております。さて、それでは彼をお呼びしましょう」

ゴドウィンはそう言って司会者を促す。

「このフォーチュンカップでは、優勝者にはキングに挑戦する権利が与えられる！彼の名を高らかにコールしよう！キング・オブ・キング！ジャーーック！！！アトラーーース！！！」

ボフン！という音と共に白いＤ－ホイール、ホイール・オブ・フォーチュンに乗ったジャック・アトラスがスタジアムに飛び出てきた。そのままライディングデュエル用のコースを疾走し、人差し指を天に掲げた。

「キングは一人！この俺だ！」

ワアアアァァァ！！！とこれまで出一番の歓声がスタジアムに響き渡る。ネオ・ドミノシティの住民にとってキング、ジャック・アトラスは英雄のようなものだ。強く、気高く、何者をも蹂躙して勝利する。その姿は見る者を魅了する。

そしてジャックはスタジアムの中心の少し高くなっているところにＤ－ホイールごと飛び乗った。そして出場者の一人、遊星を見つめる。

「・・・・・・・・」

遊星も黙ってキングを見返す。この二人には何か因縁があるようにヒカルは感じた。

第二話　黒薔薇の魔女（後書き）

いかんせんアニメを見てから時間が絶ちすぎているので細かいところまで覚えていませんでした。原作と違う場所は必ずあると思います。でも長い目で見てください。お願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3979p/

遊戯王５Ｄ’ｓ　－Healing Each Raging Odium－

2011年10月7日23時42分発行